



弘大農学生命科学部 同窓会会報

第39号

令和3年5月 発行
発行 弘前大学農学生命科学部同窓会
TEL 0172-36-2111
FAX 0172-39-3750
振替 02340-7-564
印刷 (株) 笹 軽 印刷



藤崎農場チューリップと岩木山



国立総合大学で学ぶ

HIROSAKI UNIVERSITY

弘前大学農学生命科学部

“生物学科”を有する農学系学部

生物学科・分子生命科学科・食料資源学科・国際園芸農学科・地域環境工学科

<http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/>

リンゴ新品種とリンゴの花 (上: 藤崎農場) 学部 PR 広告 (下: 札幌地下鉄)



ごあいさつ

同窓会長 高谷 清孝

同窓生の皆様には、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。また、佐々木長市学部長をはじめ学部関係者、学部後援会、地域の関係者の皆様には、同窓会の運営にご支援・ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

令和2年度を振り返りますと、まさに「新型コロナウイルス」に翻弄された1年であったかと思えます。世界的な感染拡大により、東京オリンピック・パラリンピック大会をはじめ様々なスポーツイベント等が延期や中止となり、青森県でも、「弘前さくらまつり」や「青森ねぶた祭」「弘前ねぶたまつり」等が中止を余儀なくされたほか、飲食業や宿泊業など多岐にわたる業種で甚大な影響を受けたところです。

また、弘前大学においても、授業の大幅な開始遅れやオンラインでの実施など、これまで経験したことのない対応を強いられたものと思えます。

先行きは不透明な状況ではありますが、これまでも先人達が幾多の困難に立ち向かい克服して参りましたので、今回のコロナ禍も乗り越え、1日も早く以前のような日常に戻ることを願うものです。

さて、農学生命科学部は、その前身である農学部が、昭和30年7月に当時の文理学部から独立する形で創設されました。その後、平成9年度に理学部生物学科が農学部へ移設されたことに伴い「農学生命科学部」と改称され、平成28年度には、「生物学科」「分子生命科学科」「食料資源学科」「国際園芸農学科」及び「地域環境工学科」の5学科に再編成されて今日に至っており、これまでに卒業生は8,263名、研究科修了生は1,253名を数えています。

ご承知のように我が国の農業は、人口減少や従事者の高齢化などによって経営体数が減り続けており、2020年農林業センサスによると青森県でもこの5年間で2割近く減少しています。一方で、担い手への農地集積は年々進んでおり、労働力の減少と経営規模の拡大等に伴い、作業機械やほ場区画の大型化に加え、ICTやAIの活用など新たな取組が広がりつつあり、こうした動きは今後加速していくものと見込まれています。

このような中、弘前大学においては、「地域連携・地域貢献」や「世界への挑戦」を基本理念に、地域や時代の要請に応じて食産業に貢献できる人材や、海外研修の導入による国際的な視野を持って活躍できる人材等の育成に積極的に取り組み、農業をはじめ地域産業の発展を支える人材を数多く輩出しておられますので、引き続きこうした役割を果たしていただくことを強く願うものです。

結びに、この同窓会は、皆様からの会費収入によって運営されておりますが、会員数が年々増加する一方で会費納入者は減少を続けており、とりわけ令和2年度は、これまでになく会費の落ち込みとなったところです。

同窓会の目的である母校の発展に積極的に寄与し、会員相互の連絡、親睦を図ることはもとより、学部や学生の支援などに引き続き取り組んで参りますので、今後ともご理解・ご協力を賜りますようお願いいたします。

また、皆様からのご意見や支部同窓会・会員の活動状況などの情報提供につきましてもよろしくようお願いいたします。

末筆ながら、皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。



農学生命科学部の近況

農学生命科学部長 佐々木 長 市

同窓会ならびに関係の皆様には、平素より学部に対するご協力等をいただき心より感謝申し上げます。地域貢献が地方大学の大きな使命のひとつであるとの認識がますます高まり、地域から必要とされるより良い大学及び学部づくりには、同窓生各位の協力は欠かせないことと思っております。

新型コロナウイルス感染症拡大とその対策のため、昨年は入学式が中止という事態となりましたが、今年は、入学式、卒業式が実施できる状況に改善されてきております。大学の講義は、前期はメディア教育というこれまでにない形で実施することになりました。新生入生にとっては、大学に来ることなく半年が過ぎ、友人との交流がないまま自宅等での受講は、大変なストレスであったと思っております。世界的な流行で、学生の海外研修入門という科目の中止や海外からの留学生の受け入れの自粛など、これまでにない経験の年でありました。後期からは、対面授業となりましたが、3密を避けるため間隔をあけて座ることや換気に留意しつつの授業となりました。会員の皆様も、これまでに経験したことのない状況の中、この会報を手にしておられると思います。経済的な状況も芳しくないと思いますが、学部への温かいご支援と叱咤激励を重ねてお願い申し上げます。

令和2年は学部改組後5年目になり、昨年4月からは、初めての卒業生が社会に出ていきました。学部のこれまでの教育が、社会より評価されることとなります。令和2年度の就活は、これまでの会社訪問という形からコンピューター利用の遠隔面談などが取り入れられ、これまでとは様変わりしております。学生は若いのでこの変化に柔軟に対応しているようですが、弊害も危惧されてお

ます。改組後の入試倍率は、順調に推移していましたが、今年の後期入試は、倍率も低下し、かつ受験に来た学生数が激減し、2つの学科は定員割れしております。原因は新型コロナウイルス感染症などが一因と考えておりますが、対策に苦慮しているところです。同窓会の皆様のご協力を期待しております。

令和2年度からは、全学の協力で「地域共創科学研究科」が発足しました。本学部の食品関係教員と農業経済関係の教員が新しくできる研究科に移ることになりました。また、農学生命科学研究科も地域の社会実態をよりよく知る講義を皆様のご協力のもとに実施しております。今年も昨年と同様に、卒業式後の祝賀会が新型コロナウイルス感染症対策のため中止となりましたが、寄付金の一部は学部の活動を広く支援できる形にして使わせて頂きたいと考えております。

今後とも同窓生の皆様の変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げますとともに、皆様のご健勝とご活躍を祈念しております。



卒業生の活躍



回想録

階上町長 浜谷 豊美

はじめに

私が農学部を卒業したのは1979年、まだ、比較的暢気な学生気分を謳歌できた時代だったかなと懐かしく思い起こします。園芸学科蔬菜花卉教室、奥瀬一郎先生の御指導の下、毎日実験室で卒論テーマの『ハツカダイコンの生育ステージ毎におけるサイトカイニンの発消長』（だったかな？）の実験に明け暮れた日々で、お陰様で何事にも立ち向かう忍耐と集中力(?)を鍛えられたと感謝しています。

今でも忘れられないのは、奥瀬先生がその年内にアメリカ UC Davis 校に留学されるというので、卒論を渡米前に提出しなければならず、他の学生よりも一足早く取りかかり、あの時は大学受験と同じくらい？必死で頑張った気がする。実験室には、英会話のテープが流れ、時折、「浜谷。何々を、英語でなんて言うかわかるか？こう言うんだよ、はっはっはっは。」なんとも奥瀬先生らしい笑顔と豪快な面とち密さが偲ばれます。そしてこれが後々役に立つとは思ってもありませんでした。卒業後、県職員時代に海外農業研修で1982年から1年間、カリフォルニア州サリナスにある American Takii にお世話になった。ジョンスタインベックの『エデンの東』の舞台となった町で、アメリカでの生活を通して、風土、歴史、文化そして Frontier Spirit で入植した開拓者魂を肌で感じた。この時の経験が現在の我が人生の底流となっているかなと思う。



もう一つ大学時代人生の指針を培ったものがある。今はたぶん無い（廃部？）であろう、サーク

ル、ヨット部である。毎週末、弘前駅から青森市合浦まで通い、艇庫で合宿し日中は陸奥湾で厳しい練習、夜は潮騒を子守歌？に過ごした4年間は、学部講義とは異次元の濃密な時間であったと懐かしく思い出す。スポーツ競技の小型ヨットは、優雅でロマンチックなクルーザーのイメージとは程遠く、頭と体力を駆使するスポーツだ。たとえ無風でも風をつかんで潮流を読み、また大時化では波しぶきを頭からかぶりながらも一点突破の道を必ず見つけなければならないという術は養われたと思う。これは、混沌とした現代社会、コロナ禍で先が読めない今の社会に似ていて非常に悩ましい。

わが町を思う

私は2005年に階上町長に就任し、「海・里・山」地域力を結集し、さらなる元気な階上町を目指して、現在4期目を務めている。これまで特に力を注いできた、本町の産業振興と今後の弘前大学との連携に向けた取組について御紹介させていただきたい。

先ず本町は、青森県の最東南端に位置し、「県内で一番早く朝日が昇る町、青森県の夜明けと元気は階上町から」を標榜している。町のシンボルは、平成25年5月に「三陸復興国立公園」に、そして同年9月「三陸ジオパーク」に指定された、標高740mの階上岳と、三戸郡下で本町だけの延長5.5kmの階上海岸。さらに、海・里・山の自然資源を巡る「みちのく潮風トレイル」が同年11月に開通し、八戸市蕪島から福島県相馬市までの1025kmのうち、33kmが本町のルートで、階上町の美しい自然を味わっていただける。



これまでで一番忘れられないのは、平成23年3月11日に発生したM9.0最大震度7を観測した東日本大震災。本町では、幸いにも人的被害はなかったが、最大10.73mの津波が押し寄せ、漁業者の浜小屋や漁港施設に甚大な被害を受け、その光景を目の当たりにし茫然とした。町民の再興を第一に、復旧、復興に全力を注ぎ、そして更なる高みを目指して取り組んできた。そして、平成30年5月19日、かねてより悲願であった産直施設、レストラン、漁協女性部手作り販売の「はしかみハマの駅あるでい〜ば」がオープン。予想以上に多くのお客様にお越しいただき、今年2月20日オープンから2年9カ月で来場者数70万人を達成し、コロナ禍にあっても売り上げも順調に伸びてきました。これが漁業者の所得向上につながり、今では階上町の観光施設の顔になって、海の見えるこじゃれたレストラン、新鮮で激安の魚介販売、そして地元のカッチャたちの作った手作り加工品を揃えて笑顔で出迎えてくれます。



あるでい〜ば 70万人記念セレモニー



さらに私が就任以来特に重点的に取り組んできた産業振興策の一つが、「階上早生」そばの復活、普及であります。大正2年に大凶作をもたらした冷害気象下でも相当の収量が得られたことから、県農業試験場から大正7年に「階上早生」を命名され、県内唯一の奨励品種に採用されたもの。この階上の冠をいただいた品種をブランド化し、町内外に普及していくため、閉校した旧登切小学校を

「わっせ交流センター」という名称の施設に整備し、階上早生の拠点として、生産、品質管理の一元化と販売、加工等組織化することで取り組んできた結果、作付面積も増加傾向にあり、そば焼酎「早生のめぐみ」の販売も行うまでになった。今後、弘前大学との連携協定に向けて、さらなる生産・流通・加工・販売の6次産業化に弾みをつけていきたい。そば焼酎は、地元の小学生が作った塩で作った塩サイダー割がおすすめ（写真）。



階上早生そばの焼酎と塩サイダー

また、今年から県内の学生を対象に「共育型インターンシップ」に取り組むこととしており、学生が地域にもたらす効果に、非常に期待しているところである。この事業を継続し、将来の地域おこし協力隊や移住定住、関係人口の創出を目指しており、是非、学生のみなさんには階上町にお越しいただきたい。

むすびに

私が尊敬する人物の一人に、米沢藩第9代藩主・上杉鷹山がいる。『学んだことを活かす』という実学を信条とした江戸時代の儒学者・細井平洲氏から薫陶を受け、さらに、上杉家の名家老、直江兼続を手本にして藩政改革を行った人物である。

鷹山公の経営改革の2本柱は、生産品に付加価値をつけることと、同時に人づくりを基本としている。これはまさに現代版、まちづくり活性化の原点ともいわれる。米沢の人々は、「上杉鷹山公の行った経営改革は、赤字を解消しただけではない。人間の心の赤字を消したことだ。人々の胸に、もう一度他人への愛、信頼という黒字が戻った」。

為せば成る為さねば成らぬ何事も
成らぬは人の為さぬなりけり

これはどんな状況にあらうとも、逆境に立ち向かう「勇気」と改革をやり遂げるといふ「やる気」を持ってすれば、必ず難局を打開する道はある、という言葉で強く励まされる。

研究室だより 植物病理学教室



最近の「植物病理学教室」について

食料資源学科 教授 田 中 和 明

「植物病理学教室」については、本学部のなかでは比較的大所帯な研究グループというイメージがあるかもしれません。しかし、2021年3月をもって佐野輝男先生が定年退職されます。当教室の担当教員は当面の間筆者のみとなり、次年度の学部卒業生は3名となる予定で、ずいぶんとコンパクトな研究室になった感があります。節目を迎えるにあたり、これまでの歩みを簡単に振り返りつつ、近況をお知らせいたします。

当教室は1950年（昭和25年）に照井先生が着任されたことに始まります（図1）。その後の多くの期間にわたり、教員3名の体制で研究・教育活

動を行ってきました。澤村先生の代（1971年）になってからは修士課程への進学者が増えはじめ、原田先生の教授昇任以降は、岩手連大の設立（1990年）に伴い、博士課程の学生指導も行われるようになりました。一度に18名もの学生が卒業・修了する年もありましたが（2009年）、藤田先生の定年退職後（2012年）は、教員2名体制となり、研究室に配属となる学生数も減少していきました。これまでの卒業・修了生は学部431名、修士課程92名、博士課程18名を数えます。修士課程以降に所属した学生を含めると、計450名が当教室から卒業・修了したことになります。

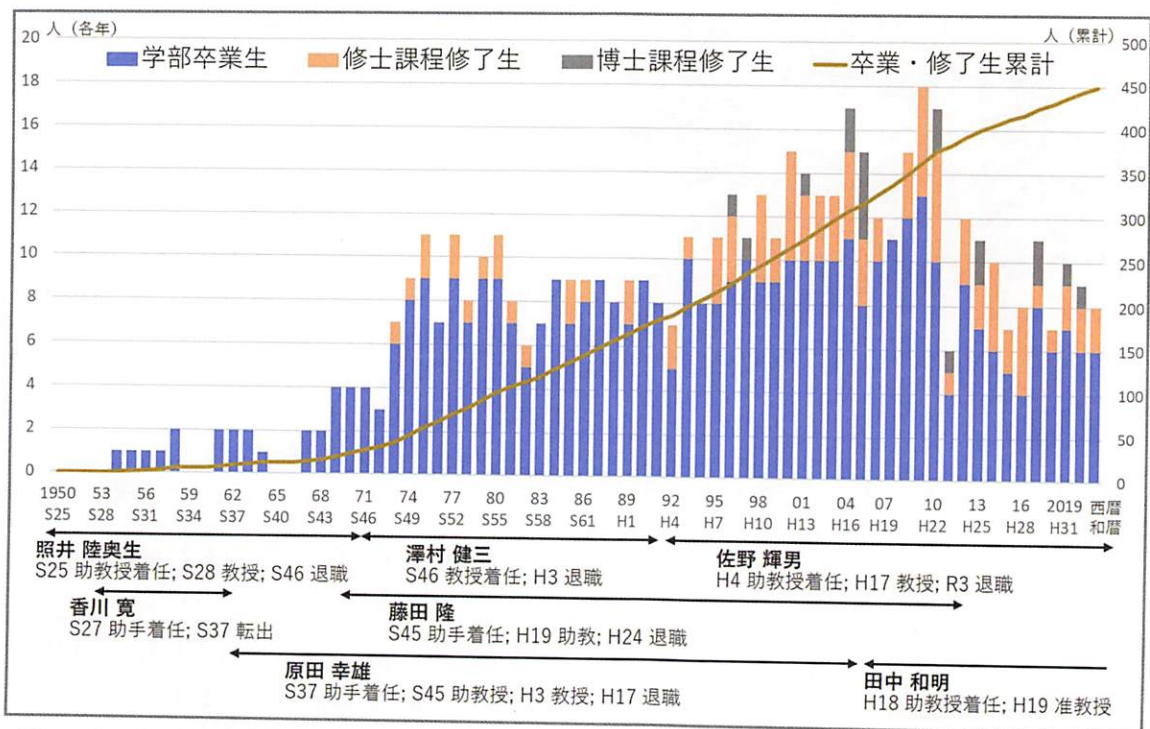


図1. 植物病理学教室の歩みと卒業・修了生数。縦軸は各年（左）および累計（右）の卒業・修了生数を表す。下段に各年代の担当教員を示した。

このような植物病理学教室にとって、2020年度は大変喜ばしいことがありました。それは佐野先生が「ウイロイドに関する研究」により、第110回の日本学士院賞を受賞されたことです。先生が研究対象とされたウイロイドは、1971年に発見された比較的新しい病原体です。先生はウイロイド研究の黎明期から現在に至るまで40年にわたって、最小の病原体であるウイロイドの研究に取り組み、その分子進化や病原性発現機構を明らかにするなど、学術的な研究をされてきました。それと同時に、ウイロイドによる病害診断や防除法の開発など、実用的な分野にも大きく寄与されてきました。日本学士院賞はわが国における最も権威ある学術賞であり、特に優れた研究業績に対し授与されるものです。弘前大学のような地方国立大で、多数のポストクを抱えていた訳でも、博士課程の学生が多かった訳でもない状況で、このような栄誉ある賞を受賞されたことは、驚くべきことです。このことは、学生にやってもらうというよりは、先生ご自身がピペットを握り先頭に立って研究を進めて来られたことと、その研究内容がいかに先駆的・革新的なものであったかを物語っているように思えます。残念ながらコロナ禍によって6月の予定であった授賞式は延期となり、それとともに学部としての祝賀会開催も次年度に見送られました。通常であれば、教室としても同窓会を開催し、学士院賞の受賞および定年退職のお祝いをしたところではありますが、これも延期とさせていただきます。次年度以降、祝賀会を盛大に開催できることを切に願っております。

佐野先生の最終講義が、2021年2月10日に行われました。密を避けるため講義室に参加できる人数に制限があったことから、Zoomでのリモート中継も試みました。平日の開催で、また比較的直前でのお知らせだったにも関わらず、当日は講義室に計107名、Zoomでは74名の方々にご出席いただきました。最終講義では先生の専門分野であるウイロイドについて重点的にお話くださるのかと想像しておりましたが、「私の出会った植物の感染症」という演題通り、先生が青森の地で植物病理学者として取り組んで来られた、さまざまな植物病害に関する内容でした(図2)。ウイロイドという学術研究対象のコアな専門分野を持ちつ



図2. 佐野先生最終講義のご様子。

つも、他の病原(ウイルス、細菌、真菌類など)による病害といった地域で問題となっている課題にも向き合われ、地域貢献されてきたことが伺い知れました。

最後になりますが、藤田先生と原田先生の最近のご様子をお伝えします。藤田先生は年に一度ほど、忘年会などにご参加くださっています(図3)。再来年には喜寿を迎えられますので、教室としてぜひお祝いさせていただきたいと考えております。原田先生もお元気で、コロナ禍の今年度はさておき、これまでは教室のほぼ全ての懇親会にお越しいただいております。原田先生は一昨年前に傘寿を迎えられましたが、大変申し訳ないことにタイミングが合わず祝賀会を開催できておりません。まとめてと言っては恐縮ですが、両先生方の長寿のお祝いと、佐野先生のご退職および受賞祝いなど、いろいろと合わせて祝賀会を開催させていただき、広い年代の教室同窓生の皆様にご出席賜りたいと思っています。



図3. 忘年会の様子。2019年12月26日。大学前の居酒屋 和楽味にて。

定年退職教員からの寄稿



農学部・農学生命科学部39年間の遷り変わり

食料資源学科 青山正和

まだ雪の残る弘前駅に降り立ったのは昭和57年(1982)の春、その後平成を経て令和の時代まで39年間にわたって弘前大学に勤めてまいりました。8年前に地域環境科学科の工藤 明先生がご退職したあとは、農学生命科学部では最長在職者でした。私の退職後は、国際園芸農学科の荒川 修先生と食料資源学科の石川隆二先生のお二人が昭和の時代からの在職者になるでしょうか。

着任時は、農学部園芸化学科土壌学・肥料学講座でしたが、その当時の教授は花田 慧先生、助教授は齊藤 寛先生でした。4月の授業開始前には研究室の歓迎会があり、そこで話をした地元出身の学生の津軽弁が理解できず、大変な所に来たものだと思います。しかし、4月からの学生実験の指導に追われつつ弘前での生活にも次第に慣れていきました。昭和の時代は、今とは別物のようにのんびりとした時代で、昼休みには教員と事務の対戦や研究室対抗など、ソフトボールで汗を流し、夕方からは芝生の上でジンギスカンとビールの生活でした。また、研究室の学生と西弘にもしばしば通っていました。

1988年に花田先生が健康上の理由で退職すると、北海道農業試験場から音羽道三先生が教授として着任され、平成に入って2年後の1990年には学科改組により生物資源科学科所属の土壌学・植物栄養学研究室となりました。それと同時に、岩手大学連合農学研究科の構成大学として博士課程大学院が設置されました。個人的には、この辺りから弘前大学農学部の変化が速まったように感じています。1993年に音羽先生が定年退職すると、齊藤先生と二人での研究室運営となりました。

1997年には、農学部と理学部生物学科が一緒になって農学生命科学部が設置されました。その際、土壌学・植物栄養学研究室は、元生物学科教員を中心とした生物機能科学科に所属することになりました。それまでの農芸化学系の学科から生物学系の学科ということで、教育内容も大きく変わりました。そして、2004年の大学法人化を経て、2008年には改組により再び農学系の学科である生物資源学科の所属となりました。2010年に齊藤先生が定年退職されると、私一人での研究室運営となり、土壌学研究室を名乗るようになりました。そして、2016年には、さらなる改組によって食品系の教員が増え、生物資源学科から食料資源学科へと変更になりました。

このように、私は昭和から平成をへて令和まで弘前大学農学部と農学生命科学部の変遷を眺めてまいりましたが、39年の間に都合5つの学科を渡り歩いたことになります。ですので、平均すると一つの学科に8年ということになりますが、学科の継続年数が短くなると、卒業生の縦のつながりが弱くなるように感じます。学科および学部の改組は、社会の要請に従ったものとして進められてきましたが、実際には文科省の方針に沿って改組ありきで離合集散を繰り返してきた感があります。しかしながら、私が弘前大学農学部および農学生命科学部での職務を全うできたのは、これまで関わった学生の皆さん、すなわち同窓生の方々のお陰です。同窓生の皆様には、この場を借りてお礼申し上げますとともに、ご健勝と今後のご発展を祈念しております。



定年退職教員からの寄稿



卒業と定年

食料資源学科 佐野輝男

令和3年3月23日、弘前市民会館で令和2年度の弘前大学学位授与式(卒業式)が行われました。式の後、卒論を指導した学生が挨拶に来てくれて、短時間とはいえ卒業生が一堂に会して式が行われた喜びを知らせてくれました。私にとっての最後の指導学生達です。昨年の4月以来、COVID-19感染拡大防止対策下で、ゼミや卒論研究そして懇親会まで、全てに制限が設けられ、時には自粛しなければならず、申し訳ない思いをしていましたが、これまでの学生と同じように元気に旅立ってゆこうとしている姿を見せてもらい、嬉しく思いました。一方、私自身もその数日前に、永年勤続者(退職者)表彰式で、弘前大学の“卒業”を祝っていただきました。定年退職者の場合、弘前大学に赴任するまでの経歴と時期は様々ですが、“卒業”の時は一緒。あらためて同年代であった方々に親しみを感じた瞬間でした。

私が弘前大学に赴任したのは1992年4月。以来、29年間お世話になりました。赴任する半年前、ちょうど採用していただくことが決まった頃、りんご台風の別名で呼ばれている台風19号が津軽地方のリンゴに甚大な被害を出したことを、遠くアメリカの地で、ニュースで知りました。テレビ画面に映し出された台風の勢力範囲が本州をすっぽり飲み込むくらい大きさであることに恐ろしさを感じたことを覚えています。青森のリンゴはどうなってしまったのだろうか?そんな思いを心の片隅に持ちながら弘前に来ました。しかし、当時は歴史解釈の上からはバブル景気の崩壊後であったとはいえ、学生さんの就職活動の話から、引く手あまたの状況を感じさせる逸話を聞くこともあり、

いろいろな面で社会が活気に溢れていたのを覚えています。教育組織上の所属は、改組に伴って、農学部・農業生産科学科(環境管理学講座)から始まり、農学生命科学部・生物生産科学科(環境生物学講座)を経て、同・生物資源学科(生産環境コース)に変わり、さらに、同・食料資源学科(食料生産環境コース)になり、現在に至ります。この間、学科と講座の名称は変わりましたが、一貫して、植物病理学、植物ウイルス病学、植物病原学、植物(作物)病害管理学などの授業を担当し、農作物の病気の原因となる病原体の基礎と防除方法に関する教育と研究を続けることができました。学部内では研究室間の垣根が低く、学部内外の教員の方々をはじめ、研究室に所属した学生さんはもちろん、他の研究室の学生さんも含めて、多数の方々と交流できたことが楽しい思い出です。また、卒業生そして同窓生の方々からは、研究材料や関連の学会活動或いは所属研究室の同窓会などを通じて、様々なかたちで温かいご支援を戴きました。定年にあたり、このような教育・研究活動の場を与えてくださった方々、支えていただいた方々、一緒に研究に励んでくれた学生の皆さんに心から感謝いたします。

思えば、大学に入学して以来、一度も大学という組織から出ることなく、この29年間は弘前大学の教員として、組織に守られながら教育と研究に携わってきました。定年を迎え、私自身、大学を卒業する気持ちです。これからは、同窓会員の一人として、弘前大学農学生命科学部の益々の発展を応援させていただきたいと思います。



定年退職教員からの寄稿



農学生命科学部にお世話になって

地域環境工学科 泉 完

私は、平成6年11月に秋田県立農業短期大学(当時)から当時の農学部農業工学科の助手として着任しました。以来、26年にわたり学部にお世話になりました。小生、昭和53年3月に弘前大学農学部農業工学科を卒業しており、母校での教育・研究活動に携わることが出来ました。当時の農業水利学教室(通称)に所属し、故・川越信清教授、工藤明名誉教授の3人で、いずれも恩師の先生でした。

研究室では、故・篠邊三郎弘前大学名誉教授から「魚道の研究」を継続しており、故・川越信清教授が現地魚道の遡上調査を本格的に実施しはじめたところでした。私も興味を示していたこともあり、調査に同行していました。遡上調査は、魚道の構造に合わせて敷き網を手作りし、トラックで現地まで搬入、現地に寝泊まりし昼夜を通した24時間で、かなりの労力を要するものです。いわば、アウトドアの人海戦術です。その矢先に川越信清教授が急逝されましたが、「魚道研究」を継続していくこととなりました。以来、現在までに至りました。

遡上調査を通して、いったい魚はどれくらい速く泳げるのか?との疑問を強く抱くようになり、魚の遊泳速度に関する研究へと展開させました。これも「現地で計測することがより实际的」という視点で、現地河川の魚道中に「院生・学生手作り」の遊泳実験装置を設けた実験を精力的に行いました。遊泳実験は相手(魚)がその河川に生息

するものを直接再捕して行うものでいわゆる自然現象に左右されます。そのため適切な時期に短期集中的に行ってきました。幸いに現地での遊泳実験として河川生息魚の遊泳速度に関する数々の新たな知見を得ることができました。遡上調査や遊泳実験は現地で実証的に行ったもので調査・実験研究をとおして、魚に多くのことを学んでいると痛感しています。また、フィールドワークで、院生・学生の協力なしでは成しえないもので、苦楽をともした院生・学生に大変感謝しています。

一方学部では、学部の後援会立ち上げ時から事務局幹事として約8年間携わりました。

また、平成27年7月に農学生命科学部創設60周年記念式典および記念祝賀会が開催されましたが、この記念事業の立ち上げから記念式典挙行まで事務局として携わる機会を得ました。学部・同窓会・後援会共催での記念事業の実行部隊裏方として大変勉強させていただきました。平成30年度からは、同窓会事務局の幹事の役目をいただきましたが、個人的な病気のために十分にその任にあたる事が出来なく、同窓会長はじめ事務局の皆さんには大変申し訳なく思っています。最後に退職前の2年間は、個人的な病気のために思うように出来ませんでした。学科教員の皆様、学部教員の方々には大変お世話になりました。今後の学部の益々の発展を期待しております。ありがとうございました。



令和2年度卒業生・修了生の卒業式ならびに就職・進学先

令和3年3月23日に、令和2年度の農学生命科学部卒業証書授与式および大学院農学生命科学研究科の学位記授与式が行われた。今年度の学部卒業生は212名、大学院修士課程修了生は55名で、農学部と農学生命科学部をあわせた卒業生は8,263名、研究科修了生は1,253名となった。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、昨年と同様に卒業・修了生だけが出席する学位記授与式となったが、式典の様子はオンラインでライブ配信された。卒業・修了生には学部に戻り学位記が手渡されたが、全体での記念写真撮影や祝賀会兼同窓会歓迎会等の催しは、残念ながら全て中止となった。卒業生にとっては、少し雰囲気異なるこの巣立ちの日がより記憶に残るものであることを期待するとともに、今後のご活躍を祈念する。



事務局から

平成17-18年度総会で「弘前大学農学生命科学部同窓会における個人情報の取り扱いについて」が制定されました。支部会開催などで、会員情報が必要な際には「同窓生情報活用依頼書」を郵送またはファックスでお送り下さい。様式は会報第23号（2005年6月1日発行）の10ページにあります。

同窓会ホームページ（<http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/dosokai/>）からもダウンロードできます。

本年度の卒業・修了生の就職先および進学先は以下の通りである（括弧内に数字を記入した場合以外は各1名である）。（令和3年3月25日現在）

生物学科

札幌市職員 (2)、(株) GrowingWay、(株) stance innovation、(株) バンダイロジカル、(株) ビッツ、(株) ベネッセスタイルケア、(株) 高津戸電子、(株) 青森銀行、(有) 瑞穂農場、イオンリテール (株)、カネコ種苗 (株)、レキオソフト (株)、公益財団法人湯浅報恩会寿泉堂総合病院、青森労働局、大和リビングマネジメント (株)、北海道職員、弘前大学大学院 (13)、北海道大学大学院 (2)、嵯峨美術短期大学、富山大学大学院、東京大学大学院、神戸大学大学院

分子生命科学科

(株) MF フィード、(株) S・Yワークス、(株) TAG-1、(株) ニトリ、(株) ニプロ、(株) バイタルネット、(株) みちのく銀行、(株) 合食、(株) 十勝大福本舗、ホクレン農業協同組合連合会、宇都宮市職員、青森県職員、東北精密 (株)、北海道職員、弘前大学大学院 (18)、京都大学大学院 (2)、東京医科歯科大学大学院、筑波大学大学院

食料資源学科

青森県職員 (3)、(株) アレフ (2)、(株) ユニバーズ (2)、プライフーズ (株) (2)、資生堂プロフェッショナル (株)、農林水産省、東亜薬品 (株)、(株) ハローワーク、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構、(株) アミノアップ、青森市職員、(株) ライケット、東洋インキSCホールディングス (株)、北茨城市職員、(株) オプティム、ホクレン農業協同組合連合会、(株) 丸大サクラキ薬局、マルハニチロ (株)、(株) 丹波屋、山形県職員、(株) 日本システムコンサルタンツ、(株) アウトソーシングテクノロジー、秋田県厚生農業協同組合連合会、(株) 牧家、全国農協食品 (株)、(株) 味の素コミュニケーションズ、東北化学薬品 (株)、(有) サンマモルワイナリー、日東金属工業 (株)、イオン東北 (株)、北一食品 (株)、いわて平泉農業協同組合、札幌市職員、オリゾンシステムズ (株)、弘前大学大学院 (10)、名古屋大学大学院

国際園芸農学科

北海道職員 (2)、東通村職員、三菱食品 (株)、宇都宮市職員、(株) MAHO FILM、全国健康保険協会、(株) NTT東日本-東北、農林水産省、(株) イオンスーパーセンター、関東東北産業保安監督部東北支部、(株) クレスト、住商アグリビジネス (株)、(株) サンデー、全国農業協同組合連合会 宮城県本部、(株) シャノン、日本原

燃 (株)、(株) ジンズ、名糖運輸 (株)、(株) スタジオアタオ、横浜農業協同組合、(株) トミイチ、公立大学法人奈良県立医科大学、(株) ロビニア、社会福祉法人七峰会、(株) 江東微生物研究所、千葉みらい農業協同組合、(株) 青森銀行、全国農業協同組合連合会、(株) 赤ちゃん本舗、大青工業 (株)、(株) 大田花き、東北農政局、(株) 知久、農業生産法人合同会社小野農園、(株) 葉王堂、(株) IBCソフトアルファ、平川市職員、JA全農北日本くみあい飼料 (株)、(株) Fattoria・di・赤坂、カゴメ (株)、弘前大学大学院 (3)、弘前大学、北海道大学大学院、東北大学大学院

地域環境工学科

青森県職員 (5)、静岡県職員 (2)、(株) オリエンタルコンサルタンツ (2)、(株) 鴻池組 (2)、NTCコンサルタンツ (株) (2)、日本工営 (株) (2)、中央コンサルタンツ (株)、千葉県職員、(株) ホーク・ワン、北海道公立学校、大成建設 (株)、(株) 吉田産業、(株) ドーコン、愛媛県職員、和光技研 (株)、応用地質 (株)、弘前市職員、弘前大学大学院 (2)

<大学院農学生命科学研究科修了生>

生物学コース

(株) グレイス、(株) シイエヌエス、(株) テクノプロ テクノプロR&D社、キオクシア (株)、コムチュア (株)、ソウルドアウト (株)、ソフトバンク (株)、マリンフーズ (株)、枝幸町職員、小岩井農牧 (株)、大平洋金属 (株)、東北緑化環境保全 (株)、日触テクノファインケミカル (株)、富士レビオ (株)、岩手大学大学院 (2)、総合研究大学院大学大学院

分子生命科学コース

ニプロ (株)、(株) ニプロファーマ、(株) 東陽理化学研究所、シミックファーマサイエンス (株)、神奈川県公立学校、地方独立行政法人北海道立総合研究機構、日本鑄鉄管 (株)、北興化学工業 (株)、岩手大学大学院 (2)

生物資源学コース

WDB (株) エウレカ社 (2)、埼玉県職員、(株) スーパーソフトウェア、青森県職員、東北女子大学、(株) サンデー、よつ葉乳業 (株)

園芸農学コース

(株) 北洋銀行、カネコ種苗 (株)、茨城県公立学校、神奈川県職員、地方独立行政法人青森県産業技術センター、北海道職員

地域環境工学コース

岩手大学大学院

新任教員の自己紹介



柳 京 熙 准教授（国際園芸農学科）

令和2年10月に着任しました柳京熙（ゆう きょんひ）と申します。出身は韓国のソウルです。来日して今年で30年になります。専門は農業経済学ですが、近年FTAおよびTPPなどの国際交渉に伴う農業への影響につ

いて研究をしています。同時に農協による販売戦略についても研究をすすめています。これからは教育に力をいれ、国際的に通用できる学生を育てられればと思います。どうぞよろしくお願ひ致します。



小早川 紘 樹 准教授（国際園芸農学科）

令和2年12月に農学生命科学部国際園芸農学科に着任いたしました、小早川紘樹と申します。専門は作物学で、これまで日本の主要作物である水稲に及ぼす地球環境変動の影響評価や作物の高品質化に関する研究などを行っ

てきました。今後、これまでの研究をさらに発展させるだけでなく、青森県の地域に根差した研究も行っていきたいと考えています。至らない点も多々あるかと思いますが、皆様どうぞよろしくお願ひいたします。



樋 口 雄 大 助教（分子生命科学科）

2020年4月に着任いたしました樋口雄大と申します。専門は応用微生物学で、これまで木質・草本系バイオマスの分解に関わる微生物の研究に取り組んできました。

今後は自身の研究をさらに発展させ、持続可能

な社会の構築を目指したバイオマス資源の利用技術の創出にも挑戦していきたいと考えております。

微力ながら、本学ならびに地域の発展に貢献できるよう精一杯取り組んで参りますので、どうぞよろしくお願ひいたします。



教職員人事

退職（定年退職） 令和3年3月31日

青山 正和（あおやま まさかず）
教授（食料資源学科）

佐野 輝男（さの てるお）
教授（食料資源学科）

泉 完（いずみ まったし）
教授（地域環境工学科）

退職（辞職）

高梨子文恵（たかなし ふみえ）
准教授（国際園芸農学科） 令和2年9月22日

佐藤加寿子（さとう かずこ）
准教授（国際園芸農学科） 令和3年3月31日

採用（新任）

柳 京熙（ゆう きょんひ）
准教授（国際園芸農学科） 令和2年10月1日

小早川紘樹（こばやかわ ひろき）
准教授（国際園芸農学科） 令和2年12月1日

樋口 雄大（ひぐち ゆうだい）
助教（分子生命科学科） 令和2年4月1日

昇任

小林 一也（こばやし かずや）
教授（生物学科） 令和3年2月1日

石田 清（いしだ きよし）
教授（生物学科） 令和3年3月1日



弘前大学農学生命科学部同窓会 令和3-4年度総会のお知らせ

令和3-4年度の総会につきまして、従来であれば会報の紙面上で皆様へ開催のご案内をしておりますが、コロナ禍ということもあり、開催時期や開催場所、実施の方法も含め、これまでにない対応を求められております。

そのため、現段階（2021年3月末時点）では、開催予定として

日時：2021年7月上旬

場所：弘前大学農学生命科学部（なお、情報交換会等は実施しない）

とのみ告知させていただきます。

今後の新型コロナウイルスの感染拡大状況によっては、オンライン開催、開催の中止も含め検討する可能性があります。

開催日程の詳細が正式決定した際には（総会開催が困難となった場合も含め）、弘前大学農学生命科学部同窓会のホームページ（<http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/dosokai>）で告知させていただきます（スマートフォンなどご利用の方は、下記のQRコードからも同窓会ホームページにアクセスできます）。

弘前大学農学生命科学部
同窓会事務局



新企画

「弘大酒を囲んで同窓会！」

コロナウイルスの感染拡大で自粛モードが続いております。なかなか集まって同窓会を行える状況ではありませんが、きっとまた皆さんでお酒を囲める日が来ると思います。そして、同窓会や出身研究室の仲間との飲み会などを企画する時が来ましたら、是非、同窓会事務局にご一報ください。会の様子の簡単なお報告やお写真を会報誌にご紹介いただくことを前提に、弘大酒をお送りいたします。参加人数が5名様以上の時は1本、10名様以上の時は2本（最大2本まで）を幹事様宛に送らせていただきます。締め切りは設けておりませんので、まずは皆様の健康を第一に考え、この困難を乗り越えましょう。そして、落ち着きましたら、出身大学のお酒を囲みながら懐かしい話に盛り上がりましょう。お待ちしております！

連絡先 加藤 幸 電話 0172-39-3869
E-mail katoko@hirosaki-u.ac.jp
栗田 大輔 電話 0172-39-3592
E-mail dkurita@hirosaki-u.ac.jp



同窓生近況だより

弘山会（山形県弘前大学農生同窓会（旧農学部））の近況報告

【はじめに】大学の同窓会名簿によると山形県出身の農学生命科学部（S36年卒業から令和元年卒業）の卒業生総人数は114名となっています。弘山会の開催は宿泊を基本とした不定期での実施となっていました。不定期開催の大きな要因として、宿泊を伴う開催は事務局や参加者の負担であることから近年は毎年の開催を最優先目的に設定し宿泊を伴わない食事会形式での開催としているところです。

【参加者の状況】個人情報保護の関係から山形県在住同窓生連絡先の把握が困難なことから、近年は勤務先が同じであり住所把握可能な卒業生への出席案内による開催となっています。このことから食事会形式の出席者が全員山形県職員関係者となってしまう、実質的に弘大県職員同窓会となっていることが大きな特徴となっています。開催では出席者間の情報交換、懇親、県職退職者の慰労を兼ねた年度末の開催となっており、毎年の出席者数が10人程度となっています。

【開催状況】会食形式の開催は平成29年度から開始され、これまで毎年度実施しています。直近の開催では、令和元年度の退職者が山形県のトップブランド米である「つや姫」の品種開発確立に長年携わり多大な貢献をしてきた結城和博氏（S57年農学科卒）



であり、氏の功績をたたえる大慰労会を兼ねた同窓会を企画し、日時・会場（R2.3.13開催予定）まで決定していたのですがコロナの感染拡大の影響により直前での開催延期となってしまいました。

【令和元年度同窓会延期リベンジ開催】 さて、延期となっている元年度同窓会のリベンジ開催をコロナの影響が小さいと思われる令和2年夏以降から秋の間に開催することで場所・日時（令和2年11月27日開催予定）を決定していたのですが、県内のコロナ感染者数の増加に伴い再度開催直前での延期となってしまい大変残念な状況となっているところです。

【今後の開催に向けて】

① 令和元年度・令和2年度の合同同窓会開催

現時点（令和3年3月）での年度内の同窓会開催は困難であり、是非、令和元年度と令和2年度県職員退職者の慰労を兼ねた合同同窓会を令和3年の早期に開催したいと思っていますところ。

② 出席対象者の拡大

前述のように近年の同窓会が県職員同窓会になっているので、多数の山形県内弘大農生同窓生が参加できるように住所の把握、開催通知および開催形式の検討・充実を目指しているところです。

（文責：柴田三郎）

会費納入と住所通知のお願い

同窓会費は、同封致しました「同窓会費納入のお願い」に貼付の振込用紙でお納めくださいますようお願い致します。

転勤や転居で住所が変更になりましたら、事務局までご一報ください。

同窓会事務局

〒036-8561 弘前市文京町3 弘前大学農学生命科学部同窓会

松崎 正敏	電話 0172-39-3804	E-mail mma@hirosaki-u.ac.jp
加藤 幸	電話 0172-39-3869	E-mail katoko@hirosaki-u.ac.jp
栗田 大輔	電話 0172-39-3592	E-mail dkurita@hirosaki-u.ac.jp

訃 報

塩崎雄之輔 名誉教授（藤崎農場）
 福澤雅志 教授（生物学科）
 伊藤真寿夫様（土肥 昭和33年卒）
 北澤亮一 様（農製 昭和33年卒）
 対馬義尚 様（農経 昭和37年卒）
 北神彰夫 様（植病 昭和37年卒）
 山内重則 様（農工 昭和38年卒）
 鎌倉二郎 様（土肥 昭和39年卒）

加藤順一 様（土肥 昭和42年卒）
 藤田哲郎 様（農工 昭和45年卒）
 玉田裕康 様（植病 昭和48年卒）
 松山博之 様（園利 昭和60年卒）
 谷地淳也 様（生化 平成6年卒）

上記会員のご逝去の報が届きました。
 謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

最新の情報は同窓会ホームページでご覧下さい (<http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/dosokai/>)